第１４４号
平成１３年９月
© 2001
E-mail :
shimz@mb.infoweb.ne.jp
LDG04167@nifty.ne.jp

SCだより

編集発行人
清水吉男
（株）システムクリエイツ
横浜市緑区中山町 869-9
電話 045-933-0379
FAX 045-931-9202

Café りふれ

9回め

MENU
特製ブレンド　380
レモンティー　350
日替りケーキ　300
ぷろせす　無料
アルコールは置いていません

ようやく秋の虫たちが自分たちの季節を主張し始めた．今年は朝顔の栽培は、１７センチを越えず、失敗だった．毎年、いろいろと挑戦するが、土の作り方と追肥の液肥の選択を間違えたようだ．それでも、今回始めて挑戦した段ボール紙を使った押し花の方法は成功した．新聞紙を使う方法と比べて、カビの防止のために紙の交換が要らず、楽に仕上がった．今年は、久しぶりに土作りからやってみるか．

今日は３連休の前で、こういう時は、一般の会社に務める人は早く帰ってしまうが、ソフト会社の人は、相変わらず休めないようである．気の毒といえばそれまでだが、自分も過去にソフト開発をやって来ているだけに、“もうちょっとやり方を考えたらどう”と思いたくなる．だからつい強い調子で話をしたりするが、この分野がしっかりしてくれなければ、日本の産業、とくに製造業の衰退を防げなくなってしまう．

窓際の丸いテーブルに若い男女の客が２組いる．２組とも、テーブルに肘を突いて顔を近づけて楽しそうに話をしている．カウンターの中から、こういう姿を見ていると、こっちも気持ちが和んでくる．

「こんにちわ」
「いらっしゃい．おや、しばらく振りですね」
「いや〜、てこずったけど、やっとのことで一段落ついたところです」
「そりゃよかったね．でも本当に大丈夫？　明日になってバグの連絡が入っているってことはない？」ニヤッと彼の顔を見ながら言った．
「マスター、人が悪いな」
といいながら、カウンターに座って、ポケットからたばこを取りだし、カウンターの右手から灰皿を引き寄せた．
「ごめんごめん．皆さんそう言いながら、明日にはバグで追われているってのが多くてね」
と言いながら、いつものブレンドコーヒーの用意に取り掛かった．

「それにしても、どうして毎回こんなめに遭うのだろう．プロジェクトが始まる時は、今度こそきちんと仕上げたいと思っているんだけど・・・」
「でも、実際に取り掛かってみると、前と何も変わらない」

「そうなんですよ」
「多いですね．いや、むしろ多くなったような感じだね」
「多くなったって？」
「今まで、泣き言を言わなかったような人も、最近はうまく行っていないような感じですね」
「ふ〜ん、そうなんだ．皆大変なんだね」
「ま、そんなことは慰めにもならないけどね」
「マスター、一体どうすれば良いんですかね」
「どうすれば良いかって？　あなたは今回のプロジェクトで何かしたの？」
「えッ」
「前回のプロジェクトと比べて、何か変えてみたところはあるのか、ということ」
と言いながら、煎じたてのコーヒーをカップに注いで、カウンター越しに差し出した．
彼は、まだ言葉を失っていた．
多くの場合、彼のように、次は何とかしたいという気持ちを持っている．だが、気がついてみると前回と何も変わっていないことに気付かされるのである．

「何とかしたい、という気持ちはあっても、具体的に何かを変えなければ、何も変わらないと思うよ」
「そうですよね．確かに気がついてみると、いつものようにメンバーが集められて、そこで課長からプロジェクトの説明があって、前回と同じように機能の分担を決めて・・・」
「つまり、何も変わっていないわけだ」
「何か、歯車が別のところで回っているような感じかな」
「ま、混乱プロジェクトはそんなもんかも知れないね．ところで前回のプロジェクト最中に、何か考えたことはある？」
「そうですね．要求仕様の書き方が良くないなって思ったのですが・・」
「思ったけど、実際には、そのまま現実の作業に流されていったということね」
「そうですね」
「勿体なかったね．思ったときに、ちょっと“ひな形”みたいなのを書いておかないと、実現しないのよね．不完全でも良いから、手がかりになりそうなものがあると、次のプロジェクトの時に取り掛かれることがあるんだけどね」
「それが秘訣なの？」
「そうだね．思ったときに手をつけるのが、変わるための秘訣かな．要求仕様を何とかしないとと思ったあと、あなたは何を考えた？」
「何を考えたって？」
「後でとか」
「そう言えば、今プロジェクトが走っているので、これが終わってから考えようと思ったですね」
「その“後で”がくせ者でね」
彼は、少しばかり悔しそうな表情を見せてコーヒーを啜っている．

「ところで、要求仕様が気になった理由は何？」
「うん、仕様に絡んだバグが多いような気がしたので」
「たとえば？」
「たとえば、データを画面から入力したときに、幾つかの項目間で整合性をチェックするのを忘れたりするのは、やっぱり仕様として書かれていないからだという気がします」
「実際、そのようなチェックの必要性が書かれていなかったために、抜けたわけだ」
「ＱＡテストで見つかったから良かったけどね」
「他には？」
「そうですね．仕様の矛盾もあったかな」
「どういうこと？」
「ある機能の仕様を希望通りに実現したのだけど、そうしたら別の仕様が満たせないことが、後になって分かったりして」
「それはどう対応したの？」
「急いで客に連絡して、状況を説明して妥協案を呑んでもらった．でも焦ったよ」
「そういう経験があったことで、要求仕様の表現を何とかしないと、と思ったわけだ」
「そうなんですけど」
「でも、何もしなかった」
「そこで行動しなければダメなんですよね」
「もちろん、プロジェクトの途中だから、出来ることは限界があるけどね．それでも、手がかりを残して置くことはできたでしょうね」

「ところで、仕様に関するバグの統計データがあると良いんだけど、バグのデータは取っているよね」
「はい、“残っています”．バインダに２冊もあって、見るのは大変です」
「現状では、バグが多いのは仕方ないね．ところで、バグの原因分析はやっているの？」
「以前にマスターから言われたことがあって、やろうと思ったのですけど」
「ですけど？」
「実は、バグ報告書が“手書き”なんで、データを集めたりピックアップするのが大変なんです」

「えッ、どうして手書きなの？」
「ISO の関係で、ＱＡからの報告の段階で課長のハンコが必要なんです」
「その段階での課長のハンコって、最終確認じゃないよね」
「はい、その後で設計者が原因や修正の仕方について書いて、ＱＡ担当者がテスト結果について追記します」
「その間、ず〜と手書きなの？」
「そうです」
私は、未だに紙で手書きであることに唖然とした．同時に、現場の人たちがその状態を疑いもなく受け入れていることに愕然とした．
「２１世紀になっても、課長の“ハンコ”のために手書きの文書になっているの？」
「そうなんです」
「それじゃ、一向に生産性は上がらないじゃない．第一“ＩＴ革命”どころじゃないね！」
「そういう規則になっていて・・・」
「おかしいね．１０年前ならまだしも．それに、ハンコでないと信用できないという発想もおかしいね．契約書じゃないのだし」
可哀想に，彼は“思考停止”の状態でコーヒーを飲んでいる．
「普段 ISO のやり方にクレームをつけているくせに、おかしなところで従順なんだね．どう考えても、「紙」は合理的ではないね．何とかしたら」■

バグの情報は、その組織にとって、何処から取り組めば良いかを知ることのできる、貴重な情報である．

(C) Copyright 2001 System Creates Inc., All rights reserved

暁の鐘の音 127

迷走する国家

日本は何処に行こうとしているのか？
世界の中で、どのような役割を担おうとしているのか？
いや、日本という国をどのような国にしようとしているのか？
まったく見えない。

もちろん、これは「国」だけの問題ではない。企業や大学、役所などの組織も、同じように、どこを目指すのか見えてこない。役所は、ただそこに「金（予算）」が降りるので、人が群がっているだけのように見えるし、企業や教育機関も、そこに「仕事」があるので、人を集めて“群がって”いるだけに見える。その仕事をどのようにこなさなければならないのかなど、たとえば生産性を意識して対応している組織は、果たしてどれだけいるだろうか。社会的使命を意識している企業や組織はどれだけあるだろうか。特に、放送局などのメディア産業の醜態ぶりが目に付く。

§　※　§

ニューヨークの大惨事の後も、日本の政府の対応は、「日本人は大丈夫か」であった。数一〇人の安否を気づかうだけで、現地で採用されている「アメリカ人」のことは抜け落ちている。

日本の新聞やテレビは、既に「発表記事」しか報道できない姿勢に慣らされていて、今回のテロの問題を掘り下げる能力もない。放送免許を脅かされることもなく、電波を流す特権の中に安住しているだけで、放送内容の質など何も考えていないのだろう。コストダウンの圧力を、放送内容の質の低下に振り向けたことに、国民の多くは気付いていない。そこには、ジャーナリズムを担うものとしての自負も誇りも感じられない。今回のテロ事件について、彼らが報道できるのは、この程度でしかないのかも知れない。

§　※　§

アメリカのテロ事件で隠れてしまったが、狂牛病の事件は、日本の社会にとって非常に大きな問題であるのに、農水省の対応は、あまりにもいい加減である。これは日本の政府が、「国民の生命と財産を守ること」を国民に約束していないことから起きた対応なのである。つまり、今回の農水省の役人の対応は、農畜産業へのダメージを押さえることに軸足が置かれたものなのである。だが、日本のジャーナリズムは、そのことを突かない。ただ、政府の発表する内容を、「自分たちの電波に乗せる」だけである。おそらく、発表以外のことを報道しようものなら、たちまち「圧力」が懸かってくることは、先の所沢のダイオキシン問題の報道と、その後の役所の対応（この場合は、農協が全面に出たが）を見れば分かる。このとき、他の放送局は、「事実」を報道しただけで、ジャーナリズムの在るべき姿として論じることはなかった。

日本の放送局はただの「仲介業者」にすぎない。彼らは、その内容が適切なものであるのかどうかを判断する能力も持っていないのかも知れない。「処分された」という牛が、焼却されたのかどうかも、突っ込まなかったし、イギリスから日本向けの輸出量と、農水省が把握している輸入量との大きな乖離についても突っ込まなかった。まるで、日本の報道機関は、政府と国民の間での「上意下達」を仕事と認識しているようである。

§　※　§

一般の企業も、社会に於ける貢献という理念が消えて、ただそこに仕事があるから人を集めているだけではないのか。その仕事をこなすのに相応しい人を集めていないし、その結果として、社会が許容する生産性を満たさず、品質の悪いものが作られたり、中には作り直しが発生している。損害賠償の認識が曖昧であったり、司法制度が機能していないこともあって、結果的に、生産性の低い状態が許されている。そこにいる人たちにとっては、必死に頑張っているのかも知れないが、そのロスは社会が負担していることに気付いていない。

§　※　§

その仕事に必要な技術を習得させ、それに相応しい人が当たるような社会にしていかないと、国全体が「自転車操業」状態に陥ってしまう。それが今の状態である。ここから抜けるには、教育システムや企業内での評価システムの改善が必要になるが、その前に、「素人国家」から「プロ国家」への脱却が、国として宣言されなければならない。国としてその方向に向かうこと、そしてそのことによって、アジアや世界に貢献するということが示され、関連する機関や組織が、その方向に向けて動かなければならない。

§　※　§

その一つの形が「格付け」である。大学の教育課程を履修しただけで「教師の資格」を与えるのは構わないが、だからといって、一〇年間教師をしてきている人と同じであるというのは、明らかにおかしい。教師の側に於ては「平等」の対応なのかも知れないが、教育（サービス）を受ける側にとっては、教師を選べない状態であれば、とんでもない不公平な仕打ちなのである。資格とその仕事につくことを同一視していることから起きている問題で、このような仕組みからは「教育のプロ」は生まれない。同じことが、病院にも起きている。患者が医師を選べない状態に在って、医師の能力が格付けされていないことも、多発する医療事故の背後にあると思っている。

一般の企業でも同じである、競争が厳しい状態に在るにも拘わらず、管理職としての「資格」と、その「役に就く」ことが同一視されているため、非効率なマネージメント（管理？）が行われることになる。

§　※　§

このように格付けされていない社会を放置していることが、今日の日本の迷走に繋がっていると思っている。■

今月の一言

「われわれのやっている大都市の建設というものが、果たして市民に幸福をもたらすものか、破滅をもたらすものか、自信がない」
（ドクシャデス・ギリシャの都市学者）

バブルの崩壊のあとの地価の下落によって、東京の中心部のマンションの人気が高くなっているという。若い人たちにとっては、大都市は“便利”だし魅力があるのだろう。だから、「地方」も、大都市に成ることを目指している。周辺の都市も、「大都市」へのあこがれが、根底にあるように思う。まるで「地方」であることを忌み嫌うかのように、大勢の人を吸い込むビルを建て、周りをコンクリートで固めてしまう。それが「地方」からの卒業証書とでも思っているのだろうか。

だが、今の大都市は、人の一生を終える処だろうか。そこにある水も空気も食物も、ほとんど全てが人が管理し、人が手を加えた「人造物」である。何よりも、生活の中に「大地」がない。そこに在る土は、大地とは繋がっていないし、大地のサイクルを持っていない。

大都市の中にも、地球のサイクルを感じ、その中で各自の役割を見いだせる「場」を設けない限り、そこは幸福をもたらさないかもしれない。